

補完療法の第一選択の方法について尋ねると、工藤氏は「なによりも患者さんが楽しく取り組めることを提案している」と話す。診察中の何気ない会話のなかで、趣味や好きなものを引き出すことが、臨床医の腕の見せ所。そうして引き出した背景をふまえて、補完療法を提案する。「やってみて合わなければ、やめる。医療医学で効果がなかった場合に、こちらから『こういうよい方法があるよ』ということを提供していく。あくまでも西洋医学や東洋医学、漢方の穴埋めとして、良い方法を取り入れる、という考えです」

2019年にアロマセラピー学会の理事長に就いた工藤氏。「アロマセラピーが医学としてなぜ効果的なのか、ということを知っていた方がいい」と、学会を牽引する医師としての立場から、推奨の根を広げたいと意気込む。

学会は全員が何らかの医療資格をもっている会員のみで構成される。たとえば、看護師の資格を持つアロマセラピストであれば、専門的観点から、アロマセラピーで症状を抑える方法を、薬とともに提案することができ、「患者さんが、もう一歩症状を抑えたい、という時に、限界量までは西洋薬でいいけど、副作用が強く体に良くない、という時、アロマで補完するという提案ができるんです。その原理はまさに『縦の糸と横の糸』だと思います。工藤氏は印象的な言葉を投げかけてくれた。「縦の糸がいくら太くたって横の糸がなければものにならない。横の糸がいくらしっかり

ある工藤氏をはじめ、看護師や施術をするセラピストなど、スタッフ全員が同じ気持ちで患者と接してもらうことが大切。そのため、デイスカッションを繰り返しながら、意思統一を図る。日々の取り組みは、漫然とまらないよう、目標をもつて向き合うことを心がけているという。時に看護師が早期認知症学会員となって、2年間の成果を学会で発表するために頑張ってきた。こう、と具体的な目標を掲げることがある。「目標は難しいことではなく、ちょっと気づいたこと、で良いんです。笑顔の頻度が増えた、肌色がピンクになって血行がよくなった、という、臨床的に感じた観察点を記録しておこうよ、と話すんです。それがありませんれば、どこかで発表する時や、誰かに説明する時の根拠になります」

「今日どっか痛い?」「わたしや今日はどこも痛くない。だいじょうぶ」いままで健康診断してどっか悪いとこあった?」そんな親しみやすい雑談のようなはじまりから、何気ない投げかけをする。「ところで首

今回お話を伺った診察室は、明るくゆとりとしたサロンのような雰囲気があった。天井には抜けるような青空と天使をモチーフにしたフレスコ画が描かれ、中央に置かれたソファアームを見守るように生花が活けられている。アロマがほんのり香る診察室に患者を通すと、1対1。患者とそのご家族以外は入れずリラックスできる空間をつくる。

物忘れの症状が出ている患者が初めて診察に訪れると、緊張して顔はガチガチにこわばっていることが多い。そんな時に、認知症医として大事にしているのが、言葉のセラピーだということ。同じことを伝えるにしても、言葉の使い方ひとつで魂が活気づけられることがある。診察のなかで、受け取る側の気持ちが吸い込まれていくような言葉がひとつでもあれば、目の色が変わる。たとえ難病をかかえていても、この病院を出る時に少しでも笑顔になっていただけたら、と考えた時に、「言葉」という原点に立ち戻ったという。

「今日どっか痛い?」「わたしや今日はどこも痛くない。だいじょうぶ」いままで健康診断してどっか悪いとこあった?」そんな親しみやすい雑談のようなはじまりから、何気ない投げかけをする。「ところで首



▶クリニック内観
やわらかいイエローで統一された待合室。院内全体にはのかなアロマの香りが漂う。多様な植物が配され、窓ガラスには目にも清々しいウォーターカーテンも。「癒しの場になってほしい」という工藤氏の想いが表現された特別な空間に仕上がっている。

Pick up!
＝ 家でできる補完療法 ＝

新型コロナウイルスの感染拡大が続くなか、外出自粛や人と接する機会が減ったことが、認知症患者にとってマイナスの影響を及ぼしていることを示唆する分析結果も出ています。そうした状況で、工藤氏が推奨するのは「家でできる補完療法」です。国民それぞれがエビデンスをとりながら、客観的に評価できるような土壌をつくっていききたいと、力を込められました。

- 1 マスクにはアロマオイルを吹きかけてあげるとよいですよ。良い香りを感じるだけでなく、ウイルスを除去する効果も期待できます。芳香療法で脳を刺激する効果もあります。
- 2 一本の生花を活けるとか植物に触れる機会を作りましょう。生きているものからエネルギーを得られる環境は脳の活性が期待できます。
- 3 家族による「タッチ」をぜひ。肩を揉んであげたり、背中をさすってあげたり、「タッチ」のコミュニケーションが心身にもよい働きをしましょう。

著書紹介

医師たちが選んだ認知症への切り札
驚きの改善報告と「ミエリン仮説」の真実

神経を若返らせて万病を防ぐ
あらゆる病気や不調の原因は「老化した神経」にある。今まで明かされることのない神経と健康の切り離せない関係について、語られている。

世界が目指す「ミエリン仮説」
最新の研究より認知症の原因は、「ミエリン(髄鞘)」の崩壊であることがわかってきた。ミエリン仮説の概要と可能性を浮き彫りにする一冊。



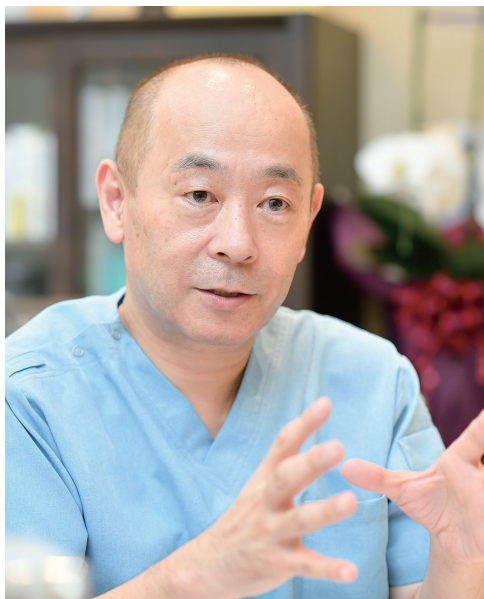
補完療法で総合的に診る認知症

〔後編〕

認知症の進行スピードを遅らせるために、西洋薬や漢方を補完するための方法として工藤氏が取り入れる療法が、アロマセラピーやリフレクソロジーだ。「例をあげると、足裏にはツボがありますね。そこを刺激することで脳が刺激され、活動が促進されるんです。芳香療法や音楽療法、芸術療法など、様々な手法を用いながら、認知症患者やそのご家族と向き合っている。工藤氏が強調するのは、そうした補完療法の根拠を示すことの重要性だ。クリニックでは、これまで取り組んだ治療のピフオアアプターの脳波数値や記録を徹底的にデータベース化し、研究を重ねてきた。「なぜ補完療法が認知症の症状を良くしていくか、というエビデンスをつくるのが医師である私の使命だと考えています」

エステティックや健康な人のためのものではなく、西洋薬や漢方を補完するための療法。医療従事者として、クリニック全体が一丸となって取り組むためには、医師で

研究を重ねエビデンスを示す



工藤 千秋氏
くどうちあき脳神経外科クリニック院長

PROFILE
英国バーミンガム大学、労働福祉事業団東京労災病院脳神経外科、鹿児島市立病院脳疾患救命救急センターなどで脳神経外科を学ぶ。1989年、東京労災病院脳神経外科に勤務。同科副部長を務める。2001年11月、東京都大田区に「くどうちあき脳神経外科クリニック」を開設。脳神経外科専門医であるとともに、認知症、高次脳機能障害、パーキンソン病、痛みの治療に情熱を傾け、心に迫る医療を施すことを信条とする。漢方薬処方にも精通。2019年11月より(一社)日本アロマセラピー学会理事長を務める。

ある工藤氏をはじめ、看護師や施術をするセラピストなど、スタッフ全員が同じ気持ちで患者と接してもらうことが大切。そのため、デイスカッションを繰り返しながら、意思統一を図る。日々の取り組みは、漫然とまらないよう、目標をもつて向き合うことを心がけているという。時に看護師が早期認知症学会員となって、2年間の成果を学会で発表するために頑張ってきた。こう、と具体的な目標を掲げることがある。「目標は難しいことではなく、ちょっと気づいたこと、で良いんです。笑顔の頻度が増えた、肌色がピンクになって血行がよくなった、という、臨床的に感じた観察点を記録しておこうよ、と話すんです。それがありませんれば、どこかで発表する時や、誰かに説明する時の根拠になります」

補完療法のためのアロマリフレクソロジー

アロマセラピーとは、植物の花や葉、果実などから得られる芳香成分(精油)を利用

精油の作用機序

嗅覚として脳神経系へ伝達する経路

嗅上皮 ↓ 嗅毛 ↓ 嗅細胞
↓ 電気的信号(インパルス) ↓ 嗅神経
↓ 嗅球 ↓ 嗅索 ↓ 大脳辺縁系
↓ 大脳新皮質(香りの認識)



香りが嗅覚器を介し、大脳新皮質の認識を待たずに直接大脳辺縁系に作用するために、主にリフレッシュ、リラクゼーション、幸福感など、さまざまな神経系のケアに役立ちます。さらにその刺激が、視床下部に伝えられることで身体の調節にも関わります。

塗り込むオイルは、毛細血管から血流に入って血の中を通過して脳に向かう。脳の中で血液脳関門を通過してやっと脳に到達する。一方の芳香療法は、血液を介さずに脳に入るため、高い効果を得られると実証されている。

用して、心身の不調や健康増進から美容に役立てる自然療法のことだ。工藤氏は、芳香療法が認知症に効果的であることを、クリニックでの脳波テストで実証し、補完療法のひとつとして取り入れている。

「メリッサという植物から抽出した精油があります。患者さんにメリッサの匂いを嗅いでもらってピフオアアプターで脳波をチェックしました。香りを嗅いでもらうことで、鼻の穴からオイルの精油分子が嗅神経に吸い付くと、ここから脳に直接入って行って、脳を刺激する、ということがわかっていきます」